

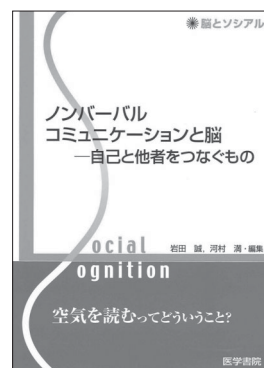


岩田 誠，河村 満●編

『《脳とソシアル》 ノンバーバルコミュニケーションと脳—自己と他者をつなぐもの』

書評者

鈴木 匡子（山形大学大学院教授／高次脳機能障害学）



コミュニケーションは「自己と他者をつなぐもの」である。本書は、その中でも言語を使わないノンバーバルコミュニケーションのために脳がどんなしくみをもっているのかをさまざまな角度からみせてくれる。本書で取り上げられているノンバーバルコミュニケーションは多岐にわたる。目の認知や視線の方向から、顔の表情や向き、身体の姿勢、動きや行為、さらに社会の中での行動までカバーされている。そして、話題はこれらの機能を支える神経基盤だけでなく、ミラーシステム、脳指紋、社会的要因と脳機能の相互関係、脳科学の社会的意義にまで及ぶ。

本書の斬新さは、広汎な研究をノンバーバルコミュニケーションという視点からとらえ直すことによって、それぞれの研究の意義を浮き彫りにしている点にある。例えば、顔認知を支える脳に関して、神経細胞活動記録、脳波、脳磁図、近赤外線分光法、機能的MRIなどを駆使した各研究は、それぞれ非常に読み応えがある。それだけ

でなく、岩田誠先生と河村満先生の対談で、ノンバーバルコミュニケーションとしての顔認知の位置づけが明らかにされることによって、個々の研究結果を統合的に理解することができる。

このように、本書はノンバーバルコミュニケーションにかかわる脳機能研究の、現時点での集大成とも言える。さらに、本書は今後の研究の方向性も示している。対談の中で、ある機能がどの脳部位と関連するかはわかってきたが、その神経細胞がどのようなアルゴリズムで機能を生み出しているかはこれからの課題であると指摘されている。また、コミュニケーションの神経基盤として一世を風靡したミラーシステムに対しては慎重な意見が述べられている。

一方、最終章では、ノンバーバルコミュニケーションに限らず、「脳とソシアル」シリーズ全体にかかわると思われる「脳神経科学と社会の関係」が取り上げられている。まだ日本ではあまり知られていない「脳神経倫理」に

ついでの話で、脳神経科学者と社会の双方向コミュニケーションの重要性が述べられている。

本書はいろいろな読み方ができる。コミュニケーションに関心をもつ人は、2つの対談でノンバーバルコミュニケーションについて俯瞰し、その上で各章を読み進めるとよいかもしれない。脳神経科学に興味をもつ人が、1つの課題についての多様な研究方法を学ぶこともできよう。脳神経倫理についての章は、脳神経科学者に1度は読んでほしい内容である。随所に挿入されたこぼれ話は、これだけつまみ食いしたくなるほど印象的な話が多い。もちろん、全体を精読すれば、ノンバーバルコミュニケーションの神経基盤について、十分な知識や洞察が得られることは言うまでもない。

A5 頁240 2010年 医学書院刊
定価 3,780円（本体 3,600円＋税5%）
[ISBN978-4-260-00996-6]